共生体育における体育授業に関する一考察

－フロアバレーボールに着目して－

森田　和永　（愛知教育大学）

１．目的

本研究では、共生の視点から体育の授業改善を行うにあたって、「フロアバレーボール」を教材として用いて大学生を対象に授業実践を行い、授業中の対象者の言動から共生体育のあり方を検討することを目的とした。

２．研究方法

１）対象者：A 大学の学生 25 名
（男子 12 名、女子 13 名）

２）調査方法：フロアバレーボールを題材としたネット型ゲーム教材を用いた授業実践

３）分析方法：実践前後と毎時間のアンケート、授業映像から運動特性の経験により得られる達成感と試行錯誤による共生の様子

３．結果と考察

１）運動特性の経験によって得られる達成感

授業映像から、授業全体のゲーム中において、学生がボールに触れた回数を計測した。その結果、触れた者と触れなかった者との間に大きな差はなかった。また、全員がバレーボールの運動特性である攻防を伴うラリーを経験することができていた。さらに、全ての学生が、得点または得点を阻止しており、どの学生も達成感を得ることができていた。

２）試行錯誤による共生の様子

授業映像から、全チームにおいて前衛と後衛でコミュニケーションをとる姿が見られた。さらに、コート外で観戦している学生もプレーしている学生と一体となって盛り上がる姿も見られた。特に、後衛は目隠しをしている前衛に対して、「もう少し右」「今より左側狙って」のように、具体的な声掛けを積極的に行っていた。ここでは、実践前のアンケートで「学校体育で行うバレーボールは得意ですか」の質問に対して、最も否定的な回答をしていた対象者Aとそのチームメイトとの関わりの様子を取り上げる。対象者 A は、初回の授業で、前衛でのプレーにおいて消極的であった。授業後のアンケートでは、対象者 A は、「目隠しをしてやるのは難しかった。チームでの連携が大切だと思った。」と記述していた。その後、自分から後衛に指示を仰ぐようになり、チーム内でのコミュニケーションの機会も増えた。チームメイトの授業後のアンケートでも、「目が見えない前の２人に分かりやすいように抽象的な表現を使わずに、声掛けをすることを心がけた」という記述から、チームに積極的に関わる姿勢が感じられた。その結果、チーム内での連携につながったと考えられる。

また、他の対象者の実践後のアンケートにおいて、「フロアバレーボールは目隠しをして行うとよりコミュニケーションが必要になると感じると共に、声かけや励ましにより運動強度や点の取れ方に違いが出てくる点で面白さをかんじました。」という記述から、運動を楽しむために仲間とコミュニケーションをとることの必要性を感じていることがわかった。

４．結論

本研究で考案した教材では、運動経験や技能の程度等に関係なく対象者全員がゲームで活躍できていたことから、多様な違いに依存しない教材であると考えられる。本研究を通して、誰もが楽しいと思える体育授業をつくるためには、結果に至るまでの過程から得られる達成感や、仲間と協力することによって得られる達成感を味わえるような授業を目指す必要があると示唆された。また、多様な違いを持つ学習者が仲間とともに運動を楽しむために試行錯誤する姿は、共生体育の実現において期待できる姿であると考えられる。